

対談 今福龍太×朝吹真理子 抽斗ひきだしのなかの海、迷宮のなかの虎

——ソング、ボルヘス、生きている石、そして〈永遠〉について

報告 山口裕之

一見、異色の組み合わせとも見える対談である。

十年ほど前に今福龍太氏と朝吹真理子氏が読売新聞で書評委員を担当していたときに、打ち合わせの場で顔だけは合わせていた。しかし、話をするのは今回が初めてだという。二〇一一年一月の書評欄でスーザン・ソングの『私は生まれなおしている 日記とノート一九四七—一九六三』（河出書房新社、二〇一〇年）がとりあげられることになったとき、二人がどうしてもということでの書評を希望したために、クロスレビューのかたちで掲載されることになった。会場で配布されたリーフレットにも収められたそのときの記事は、二人の紙面での出会いをいまくつきりと浮かび上がらせて伝えるものとなっている。

ソングは確かに今福氏と朝吹氏の双方にとって重要な位置を占めるものであることはそこからも強く感じとれる。しかし、それをさらに包摂するような大きな力のうねりが二人のあいだにはあるのではないか。それは何よりも、異なる時間が地層のように一つの空間のうちに重なり合う感覚であり、そしてまた、そのなかでの生々しい身体感覚であるようにも思える。

対談のタイトルとして掲げられた「抽斗ひきだしのなかの海、迷宮のなかの虎」は、それぞれ朝吹氏と今福氏の直近の著作の標題か

らとられたものである。朝吹真理子氏の『抽斗のなかの海』（中央公論新社）は、『流跡』・『きいとわ』・『TIMELESS』という三つの小説に続いて初めて出版されたエッセイ集。そして、今福龍太氏の最新の著作『ボルヘス伝記集——迷宮の夢見る虎』からとられたタイトルの後半部分は、いうまでもなくボルヘスにとって最も重要なイメージに関わる。

今福龍太氏は、見事にまとめられた映像とともに、スーザン・ソング、『抽斗のなかの海』、ボルヘス、石、食ること、リオといった軸を与えることによって、自由な対話のなかでテーマに沿って話を進めてゆく。朝吹氏にとって、抽斗のなかに原稿を入れると、そのなかは「海」であって、そこに投函すると、武満徹にも中世にも日本語が絶滅しているところにも繋がっている。そこでは時間が溶けている。それに対して今福氏は、合理的・機能的に書かれ、そのような宛先をもつものでは何かが失われてしまう、と応える。抽斗のなかにしまい込むということは、直線的な送り方でなくてもよいということでもある。あえて迂回する手紙、というものもありうる。そのような迂回を経た、旅をする手紙のイメージ。

ボルヘスの作品にもまた、あるいはボルヘス自身にも、そのように抽斗のなかにしまわれたかのような感覚がある。すぐれ

た作品はひっそりと書かれ、抽斗のなかにしまい込まれる。朝吹は、こっそりと読むというボルヘスの感覚を口にする。迷宮のなかで一緒に遊んでいるかのように、「夢」について書き、そしてこっそりとそれを読む。二人は、その感覚を共有している。

今福氏の著作のなかで繰り返し広げられるバベルの図書館の圧倒的な数の叙述、そのイメージを引き継ぎながら、映像とともに語られるさまざまな「石」の姿、口の感触で生々しくたどる石の感覚と「食べる」ことの身体性、そして最後は武満徹の音と言葉に行き着く。濃密な二時間だった。

対談 今福龍太×朝吹真理子

抽斗のなかの海、迷宮のなかの虎

——ソクタグ、ボルヘス、生きている石、そして〈永遠〉について

日時：二〇一九年十二月十一日（水）

場所：東京外国語大学 アゴラグローバル プロメテウス・

ホール

対談者：今福龍太（東京外国語大学）、朝吹真理子（作家）

司会：山口裕之（東京外国語大学）

主催：東京外国語大学言語文化学部

共催：東京外国語大学総合文化研究所